



公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第80号



式典参加者 三秀台

2022 宮崎ウェストン祭を終えて

荒武 八起

仮称2022宮崎ウェストン祭

人・山・自然をこよなく愛したウォルター・ウェストン師は、新たな感動と自然を愛でる心を忘れるなというメッセージを今年も晩秋の風に託された。ここ三秀台にはリンドウ・ウメバチソウなどの花が咲き、刈り干しを終えた草原はなだらかな起伏をなし牧歌的な広がりを見せている。祖母山は先兵のような筒ヶ岳を左に、赤川浦岳を右に従えて優美に両翼を広げている。目を転ずると西に阿蘇山、北に九重の山々が秋霞の中に遠望できる。

コロナの影響で「宮崎ウェストン祭」は、昨年、一昨年と中止を余儀なくされ、今年もまた中止となった。しかし、それでは淋しいということで、「2022宮崎ウェストン祭」という仮称のもと九州管内の各支部に案内をしたところ、北九州支部2名、東九州支部8名、熊本支部5名、宮崎支部21名と多くの会員が参集した。また、田上敏行会員には講話をお願いしたところご快諾いただいた。その上、日本山岳会坂井広志副会長のご臨席を賜ったことは望外のことで感謝申し上げたい。

式典は、東九州支部の加藤会員・下川会員による点鐘に始まり、黙祷、献花(竹田会員・蔵屋会員)、宮崎支部長あいさつ、坂井副会長のお言葉、田上敏行会員による「九州におけるウェストン師」の講話に続き、「ウェストン師にささぐ」詩朗読(栗林会員)、「ウェストン祭の歌」合唱指揮(谷口会員)、そして北九州支部長日向氏の万歳三唱で終えた。その後、地元公民館に移動し昼食を兼ねて懇談会を行い、各支部から現況などを話していただいた。

和やかな中にも有意義な一時の後、再会を約束して解散した。我々は親父山の登山口でしばし紅葉を楽しんだ後、帰途についた。

先達のご功績

ここで今一度、ウェストン師顕彰祭として発足し、宮崎ウェストン祭として引き継がれるまでの経緯について、佐藤光俊氏の記述を基に振り返ってみたい。昭和33年(1958)に榎有恒氏(元日本山岳会会長)が大分在住の日本山岳会会員・加藤数功氏と共に高千穂に来られた際、地元有志との懇談でウェストン師の祖母登山が話題に上った。昭和37年(1962)、地元五ヶ所の矢津田家に残された日記にウェストン氏が明治23年(1890)11月6日祖母山に登山されたとの記載が発見された。これを機に高千穂町議会佐藤正松議長が中心となって「ウェストン顕彰碑建設特別委員会」が組織され、碑が完成した昭和41年(1966)11月6日にウェストン顕彰碑除幕式が行われた。碑にはウェストンの生家から贈られたヨーク石も使われた。昭和42年(1967)11月6日、北稜山岳会が高千穂町後援で「第1回ウェストン師顕彰祭」を開催した。当時のウェストン碑には洋鐘がついていなかったもので、北稜山岳会が会の事業として「ウェストン顕彰碑に洋鐘を」と呼びかけ募金活動を開始した。不足分は会員が拠出することにより昭和47年(1972)によりやく完成し、宮崎県山岳連盟の協力のもとに「懸鐘式」が挙行された。ウェストン顕彰祭は、昭和51年(1976)まで継続されたが、北稜山岳会が目的達

成として解散したため通算10回で終焉した。その後幾度かウェストン師顕彰祭復活の兆しはあったが実らず、9年間の空白が続いた。昭和60年(1985)に日本山岳会宮崎支部の設立に合わせて、高千穂町共催の形で「宮崎ウェストン祭」が発足し現在に至っている。ウェストン師顕彰碑建設が起案され今日までの約60年の歴史の中で、ウェストン碑の建設に伴う浄財募金活動及び顕彰祭の継続等において先達の並々ならぬご尽力があったことを忘れてはならない。

今後の課題

現在、宮崎ウェストン祭は、高千穂町当局をはじめ、高千穂町観光協会、高千穂町商工会議所、地元村おこし協議会、地元小学校、地元山岳会など多方面からのご支援のもとに維持されている。しかし、少子化、高齢化、過疎化などの波及は「宮崎ウェストン祭」も例外ではなく、式典及び村おこし協議会主催の交流会への参加者数は年ごとに減少する傾向にある。

今回の式典における田上敏行会員の講話でウェストン師は祖母山以外に桜島・韓国岳・高千穂の峰・阿蘇山・金峰山などにも登頂した記録があることを拝聴した。また、上高地ウェストン祭をはじめ全国各地8ヶ所ほどでウェストン祭が行われている現状から、会報「山」の2017年11月号に早田道治会員が「ウェストン師のように全国で崇められ祭られている外国人は珍しいので、日本山岳会の音頭取りでウェストン祭サミットを開催しては」と提案している。このようなことも念頭に今一度原点に立ち還りウェストン師顕彰の在り方について皆で知恵を出し合い、より良い形で後世に継承しなければならない。ウェストン師が「九州の軽井沢」と称賛したという風光明媚な五ヶ所高原、そして、そこで開催される宮崎ウェストン祭を多くの方々に広くアピールし、山仲間の連携と地域活性化に繋げていくべきと考える。



三秀台より祖母山(中央奥)



講話 田上会員



献花(竹田会員・蔵屋会員)



合唱指揮 谷口会員



詩朗読 栗林会員



万歳三唱 日向会員



点鐘 加藤会員・下川会員



坂井副会長あいさつ



昼食後 懇談会



[9月定例山行-1] 一の峯・二の峰 9月11日(日)

多田 登美子

一ノ峯・二ノ峯は阿蘇南外輪山の俵山と冠ヶ岳の中間くらいの外輪壁から西に伸びる尾根の二つのピークである。朝6時にマイクロバスで出発。一ツ葉有料～西都インター～益城熊本空港を経て、西原村宮山集落の中の細い道を道幅の心配しながら通り抜ける。9時頃目的の道路脇の駐車スペースに到着。準備体操で体をほぐし第2登山口を9時20分に出発。高低差の少ない草地を、ハギ、クズなど見ながら歩く。一ノ峯への登山道はほぼ一直線に草原の中を頂へと伸びている。広大な南阿蘇の草原の中を高みに登るに従い徐々に視野が広がって遥か雲仙普賢岳も望めた。草原の広いこと広いこと、阿蘇の雄大さに圧倒された。この景色をこの年まで知らなかった事もショック。マツムシソウやホソバナノヤマハハコが可憐に咲いていた。頂き近くには、キリッとした色のオミナエシも。

一ノ峯の下りに栗の木が茂っている所を過ぎると巻道と出合い二ノ峯の登りとなる。二ノ峯の頂は巨岩で占められていて、北側と南側で見える景色が異なる。各々分散して昼食をとる。南側は冠ヶ岳からの道が見える。冠ヶ岳に登った日向の二人の会員がどこから現れるか楽しみながら待つが、登山口まで続く巻道まで二ノ峯から下りたところで感激の出会いとなった。ここまで道なき道を下りて来たそうである。

帰路は俵山峠で阿蘇の展望を楽しみ、高森のトンネル～高千穂～延岡インター～西都インター～出発地に18時30分に到着した。南九州を一周した心に焼きついた山旅となった。何回も下見を重ねマイクロバス通行の可能性、駐車スペース、そして登山道の確認などをしてくださった栗林会員のご苦勞に感謝申し上げたい。

〈参加者19名〉 清家順子・谷口敏子・多田登美子・服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・竹田裕見子・荒武八起・日高研二・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・四宮林三・平田五男・栗林忠信・福島龍好・会員外2名

〈コースタイム〉 ヤマダ電器駐車場6:00～登山口9:00～一の峯10:50～二の峰11:50(昼食)/12:30～登山口14:00～もえぎの里14:20/14:40～俵山14:50/15:10～宮崎市18:30



一の峯を目指して



一の峯山頂



マツムシソウ



オミナエシ



ホソバナノヤマハハコ

[9月定例山行-2] えびの高原池めぐり 9月24日(土)

白賀 智子

北アルプス遠征を翌日に控えた会員が多かったので、本日の定例山行は5名だけの参加となった。台風14号の爪痕が残る河川敷駐車場に8時集合。いつも集まりが早いので 集合=出発と心得ている。2台に分乗して出発した。途中通行止めのため迂回し、予定より30分ほど遅れてえびの高原駐車場に到着した。

快晴ではあるが、韓国岳頂上付近はガスで見えない。

晴れると良いなあーと思いながら池巡りにスタートした。清らかな流れの梓川の川風を受けながら、河童橋を渡って行くと...アッこれは...「上高地」への妄想である。白鳥山分岐で、鹿を発見したが、音を立ててしまい、ピヨーン、ピヨーンと走り去り撮影に失敗した。紅葉には少し早かったが、ススキも秋の風に吹かれて、気持ち良く散策できた。

11時40分、白鳥山到着。山頂でしばらく休憩。霧島の景色を楽しみ、韓国岳をバックに全員で写真撮影。北展望台で昼食し、六観音御池に向かう。六観音御池湖畔にある豊受神社にお詣りし、巨木杉、池に映る山々を楽しみ、来た道を戻る。北展望台分岐から白紫池経由で白鳥山分岐に向かう。若かりし頃、何度もスケートにきた白紫池。冬にしか来たことが無かったので秋の風景は新鮮であった。池巡りは、身軽な服装のハイキング客も多く、ワンちゃん連れの方も居て楽しかった。えびの高原駐車場を14時20分に出発し、16時30分に河川敷駐車場に到着した。秋晴れの中、良い運動になった。いつか私もアルプスに行けるように山行に参加したい。

[10月 定例山行] 開聞岳 10月22日(土)

吉田 直人

深田久弥が選んだ日本の百名山は九州に六座ある。開聞岳はそのうちの一つだ。本年度本支部の山行きは、悪天候で難儀したこともあったが、10月22日は好天に恵まれ絶好の行楽となった。開聞岳は美しい円錐形の山、左右対称整った姿は富士を小ぶりにしたようで、古来多くの登山者を魅了してきた。その優美な姿は登行意欲をかき立てる。生物学者エドワード・モースは日本滞在記『日本その日その日』の中で、明治12年(1879)頃鹿児島を訪れたことを記している。開聞岳登山の記述はないが、海岸から開聞岳を眺めた時の美しさを記録していて、そのスケッチも残している。明治の姿は今とまったく同じである。

開聞岳は薩摩半島南端に突き出た単独峰であることにより、絶えず強風の影響を受けるだろう。裾は灌木だろうと思っていたが、これは大間違いで、豊かな深い森を形成していた。登りは3時間を要する。いささかの疲労は覚悟しなければならない。入山は北斜面からで、元気いっぱい東斜面へ出、いつの間にか南斜面へと変わる。アサギマダラが頭上を舞うのを見た。優美な森に美しい蝶、きっと屋久島か種子島から海を渡ってきたに違いないと想像しながらのそぞろ歩きのなものはこの山の醍醐味と思う。さらに行くと今度は西斜面へと出る。この日は暑かった。とにかく暑い。発汗は夥しく休憩のたびに水分補給である。弱音を我慢しなければならなくなってきた。この辺りから岩場が増えてくる。そして北側によく苦労して回って岩をよじ登ると待望の山頂だ。池田湖から鹿児島湾、遠く霞んで桜島にかけて眺望はよい。裾からぐるりと螺旋を描いて登ってきた。谷らしい谷が見受けられないので、このようなルートになるのは必然なのだろう。世にも珍しい登山道と言える。

秋たけなわの登山日和だったと書きたいところだが、暑かった。よく考えると、ここは九州南端に突き出た岬

<参加者5名>

清家順子・白賀智子・日高研二・四宮林三・川越政則
 <コースタイム> 大淀川河川敷駐車場8:00～えびの高原駐車場10:00/10:30～白紫池分岐11:00～白鳥山11:40～北展望台11:55(昼食)～六観音御池12:30/12:40～白鳥山登山口13:30～第二駐車場13:50/14:20～大淀川河川敷駐車場16:30



10月22日(土)

熱帯気候か。もとより秋は感じにくい所なのかもしれない。しかしそれでも麓ではセイタカアワダチソウの群落を目にした。これはかろうじて秋の訪れを感じさせる光景と言える。短い秋が去り、短い冬が来て、すぐに春だ。またいつか開聞に遊びたいと願っている。何とかそれらしく、季節の山行きになるよう以下に作句した。

開聞の姿みとれる残暑かな
 開聞の百名山は天高し
 開聞の海峡渡る秋の蝶
 開門の苔なめらかに秋日和
 開聞の北壁に仰ぐ鰯雲

<参加者9名> 服部澄子・栗林淳子・蔵屋とよ・白賀智子・吉田直人・日高研二・武田芳雄・服部岩男・四宮林三

<コースタイム> 清武ナフコ駐車場6:50～霧島SA 7:40～桜島SA 8:30～開聞山麓ふれあい広場10:10/10:15～登山口10:25～五合目11:30～山頂13:40(昼食)/14:10～五合目15:50～開聞山麓ふれあい広場16:50～桜島SA 18:25～清武ナフコ駐車場20:10



山頂にある皇太子殿下登山御立所



[12定例山行] 西林山・山陰農民一揆逃散の古道を歩く 12月18日(日)

平田 五男

西林山は日向市から東郷町に入り、歌人若山牧水が生まれ育った坪谷から尾鈴山山系の北東の端に位置する。今からおよそ330年の昔、江戸時代、日向の国(延岡藩)で大規模な百姓一揆が起き、一夜にして老若男女1400人余りが牛馬ともに逃散した。その一部300人余りがこの西林山の肩を麓から七曲越(500m)に上がりその先、田の原長崎に降りて、今の東都農町の又猪野で高鍋藩に止められ保護された歴史がある。

今日は山行前に『絵で語る山陰百姓逃散一揆伝』を出版された林田陽子さんに、東郷町道の駅公民館で20分位、封建時代の圧政に屈せず、自分たちの暮らしと

命を守ろうと、闘い抜いた物語を当時の犠牲者への供養の気持ちを添えて描かれた経緯を語って頂いた。

登山口(112m)に到着すると余り整備されていない西林山の手前口から急坂の植林された杉林を九十九折に上がっていく。夏の台風で倒木が多くみられる。1時間ほどで七曲越前の広場に出たところで少し早めの昼餉を摂る。藪漕ぎが必要な足場の悪い細い古道を当時の歴史を重く感じながら下山した。

＜参加者7名＞ 橋口三枝子・荒武八起・日高研二・武田芳雄・服部岩男・四宮林三・平田五男

＜コースタイム＞ ヤマダ電器駐車場7:30～東郷町道の駅 9:15/9:40～登山口10:20～林道12:00/12:30～登山口13:45～ヤマダ電器駐車場17:00



東郷町仲深付近より西林山(右)と七曲峠への山並み



西林山登山口(右)と百姓逃散の道入口は50mも離れていない



古道と林道との出会い(七曲越前)

林田陽子著「山陰百姓逃散一揆伝」の紹介



逃散一揆が起こった背景。逃散した農民たちは1年近くも高鍋藩に留め置かれたこと。延岡藩と高鍋藩による調整では解決せず、江戸幕府の介入に至り、農民20名が江戸に呼び出され厳しい取り調べを受けたこと。

その間に多数の農民が獄死したり、磔や打ち首などで落命したこと。延岡藩も無事ではなく、城もない僅か一万石の糸魚川に転封となったことなど、一揆の詳細が巧みな文章と絵で解説されている。

通信手段の乏しいこの時代にどのようにして隠密に事を運んだのか、いかなる方法で農民をまとめ得たのか興味は尽きない(文責・荒武)

西林山

元宮崎支部長・大谷優著「みやぎき百山」から抜粋

「母恋しかかるゆうべのふるさとの桜咲くらむ山のすがたよ」牧水15歳のみずみずしい感性の歌。牧水は『みなかみ紀行・追憶と眼前の風景』の一節に「思いだすのは、その山に山桜が咲き出す頃の美しさである。尾鈴からその連山の一つ、七曲峠といふに到る岩壁がちょうど私の家からは真正面に仰がれた。幾里かに互って押し聳えた岩山の在りとも見えぬ襲々に、ほのぼのとして咲きそむる山ざくらの花の淡紅色は、躍り易い少年の心にまったく夢のような美しさで映ったものであった・・・」と記しているが百年過ぎた今もこの山の情景は変わらない。(・中略・) 里山にもかかわらず、山頂まで高度差約700mに及ぶ。鎮守の森若宮神社前の登山道は「百姓逃散の道」であった。(・中略・) 岩山という荒々しさと緑に包まれた優しい山容が少年時代の牧水の心をとらえ詩情をはぐくんだ山であり、心の中にふるさとの原風景を描きながら歌の旅を重ねたに違いない。

[グループ山行 上高地・北穂高岳] 9月25日～29日

今回の山行は、横尾までのA班4名(谷口菊美・谷口敏子・多田周廣・多田登美子)と北穂高岳を目指すB班6名(服部岩男・服部澄子・橋口三枝子・栗林淳子・蔵屋とよ・荒武八起)の2班に分けての行動となった。

< A 班 > 山仲間へ感謝

谷口 菊美

大谷前支部長の7回忌を終えて1年後に供養の北穂高岳に登った。それから10年の歳月が流れた。今は心臓を患ってから少しの坂でも息苦しい。山には登れないが、もう一度上高地や梓川沿いでも歩いて穂高連峰を眺めたいと参加した。上高地の雰囲気は変わりなく、ウエストーン碑・河童橋・梓川は昔と変わらない姿で迎えてくれた。B班を見送りA班4人で歩き出すが坂になると足が止まり、多田さん夫妻に迷惑をかけた。次々と若い登山者に追い越され「情けない」と呟きつつ、倍以上の歩行時間をかけて徳沢園に着いた。翌日の横尾までの道は広くなっており歩きやすかった。横尾に下山してくる人々を見ながら、願わくば涸沢ヒュッテまで行き穂高連峰を眺めたかったと無念であった。しかし10人の楽しい仲間と、米寿で此处まで来れたことを良しとしよう。山研での全員で飲んだ酒は最高に美味かった。改めて仲間へ心から感謝したい。

80歳の上高地散策

多田周廣

何年振りかの上高地・穂高である。80歳の記念に北穂高を目指そうと思ったが、とてもとても。気持ちは青年、現実には老年。河童橋から見る穂高連山の素晴らしい景色、橋の下を流れる澄みきった梓川。箱庭を大きくした景色は今もあの時と同じである。涸沢・穂高連山を目指す若者達を見て「今のうちに大いに挑戦しておけよ」とエールを送りたい衝動に駆られる。河童橋は明治43年(1910)跳ね橋が架け替えられて最初の吊橋となり、この橋を初代河童橋とすると平成9年に架け替えられた今の橋は5代目である。幾万人の岳人が渡り歩いたであろうか。梓川は犀川(さいがわ)、千曲川と名を変えて大河、信濃川となる。上高地入り口の大正池から梓川に沿った上流部までの沢には八右衛門沢・善六沢・長七沢・長堀沢とあり、幕藩時代の松本藩の杣人の名で、山仕事で命を落とした者の名前が付けられたと言われている。感無量の風景である。

今回は日本山岳会上高地山岳研究所に二泊、横尾山荘一泊、徳沢園一泊それぞれお世話になった。横尾山荘の前の橋を渡ると涸沢・穂高連山へ、右真っすぐは槍ヶ岳行きの中継点である。横尾山荘の思い出は、中房温泉・大天井岳・槍ヶ岳・上高地と縦走した際のシャワーである。四日間の垢を全て洗い流した後のビールの美味かったこと。但し石鱈は使えなかったが。河童橋近辺から徳沢園までの梓川沿いはハルニレ・ブナ・白樺の続く素晴らしい歩道である。徳沢園は井上靖の小説「氷

壁」で有名になった別荘風の宿で、昔「明治18年～昭和9年(1855～1934)」はこの辺り牧場であった。この宿は夕食に必ず「ステーキ」を出してくれる。この宿から見える景色は正面右上に屏風岩のある屏風の頭、ほぼ正面に茶臼ノ頭、その奥に前穂高、更に奥に奥穂高、ここからは見渡せないが、穂高岳の大パノラマである。横尾山荘から河童橋までの帰り道の長かったこと。9.2km私にとって限界であった。

最終日、バスセンターの手前に「内野常次郎の碑」を見つけた。この人はウエストーンもお世話になった北アルプスの案内人・上条嘉門治の弟子であるが、ある日秩父宮殿下が妃殿下をお連れし明神池でイワナ釣りをされた。妃殿下が倒れそうになられた時、思わず「おかみさん大丈夫ですか」と言った。それを聞いた取り巻きの人々はケンカランと騒ぎ出した。しかし殿下は「常さんは、おかみさんでよろしい」と言われた。なんとも常さんの人柄が表れた逸話である。いろいろと思い出に残る山行きであった。

上高地から横尾山荘

多田登美子

谷口夫妻と私共夫婦は平均年齢83歳の四名、十四、五年ぶりの上高地である。翌朝、山研小屋から梓川の右岸をウエストーン記念碑まで下りそこから明神橋まで右岸を歩いた。防災等の為の車道が川沿いの道より山側に見え隠れして続いている。登山道は上高地から穂高岳また槍ヶ岳に入る人々の列である。私は十数年前に表銀座縦走で槍ヶ岳からこの道を下った。

明神池・徳沢園・横尾でキャンプする人なども歩いている。明神池までは梓川散策を楽しんでいえる人たちもいた。その中で車椅子を押し、幼子を抱っこした家族に出合った。車椅子に乗る老母を中心に娘・孫・ひ孫と女性だけの一行に見えた。勿論この歩道は舗装道路ではない。車椅子の主も段差のある場所では杖に頼って歩いていたが、実に嬉しそうに揺れる車椅子の上で梓川の景色を楽しんでおられた。始終穏やかな表情でひ孫さんの相手をしながら進んでおられたが、帰途は大丈夫だろうかと思った。明神橋の手前で山研小屋で握って来たおにぎり弁当を広げている時、その一行に話しかけ帰りの道は明神橋を渡って左岸を下られた方が近道で安全である事を勧めた。確信は揺らいでいたが、二日後の帰路左岸を歩きやっと安心できた。

徳沢園は様変わりしていて、カプセルの個室で一人一人休む。横尾山荘までは、車道の整備工事が着々と進んでいる感じがした。やはり防災の為

の対策であろう。横尾山荘前の広場は、横尾大橋から穂高に入るツアー、真っすぐ槍ヶ岳に向かう人たちが賑わっている。荷揚げのヘリコプターが幾度も往復している。私は槍ヶ岳の見える所までと川筋を上がったが、ガスがかかり始め引き返した。

横尾山荘に着くと、主人が宿泊受付開始を待つ男性と話していた。聞くところによると穂高連峰のツアーで奥様と参加したが、本谷橋付近で足に違和感を感じ一人下って来たとの事であったので常備の貼り薬を渡し

穂高彷徨

谷口 敏子

ふたり行く最後の山旅リビングの一隅占めて旅荷広がる

山靴もストックも小まめに点検し荷作り万端待つて穂高

変はりなく迎へてくれ河童橋^{やまんちゅ}山旅人十人並んで撮らる

河童橋より振り仰ぐ穂高連峰しばし竹む胸熱くて

岩壁にウエストーン碑は静もりて「登っておいで」と言はれたやうな

梓川の瀬音聞きつつ歩み行くつぎつぎ若きに進み越されながら

登りにはいくたび足を止める夫すかさずわれは脈確かめる

大学から岩登り来し山男「不甲斐ない」とふ米寿の夫は

辿り着く徳澤園に眞向かへる「氷壁」のモデル前穂高屏風岩

徳澤園・横尾・ヒュッテは様変わり昔の小屋の面影はなし

穂高連峰縦走せし日の奥穂高・吊り尾根遙かに思ひ巡らす

岳友六人北穂高岳^{ども}に着く頃と十年前見し絶景想ふ

北穂高組の六人迎へる河童橋「お疲れさーん」駆け寄りハグす

行き帰り肩に食い込む荷を解きて最後の宿でワインを開ける

旅終へて酒回りゆく打ち上げ会声令はせ歌ふ「穂高よさらば」

こまごまと友への土産運びゆく旅の終りのひとつ楽しみ

老友に頼まれ絵景書数枚と記念の山シャツ手ぬぐい購ふ

再びは来ることなきか上高地・河童橋・穂高振り返り見る

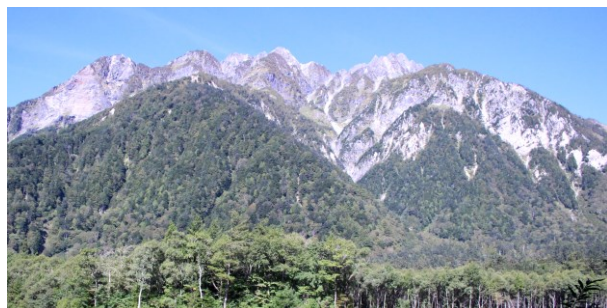
老い我に岳友は優し^{ども}もさつと寄り荷を持ちくるる空港までを

帰りきて旅荷を解くその間もこころはまだ穂高彷徨ふ



河童橋

た。痛みが引いて良く眠れたと翌朝聞いて安心した。定年後登山を始めまだ日が浅くツアー参加はちょっと無理があったのかと思われる。私も主人の退職後、すぐ日本山岳会に入り山歩きを始めた。出会った先輩方が素晴らしく、今回一緒にさせて頂いている谷口さんに北アルプス、中房温泉一泊目から槍ヶ岳徳沢園五泊目と余裕のある計画で引率して頂いた。この初めての山旅の感激が今も続いている。感謝しきれない。



徳沢園付近から前穂高岳、明神岳



涸沢ヒュッテから穂高の山々



北穂高岳山頂



山研、夕食後

< B 班 > 北アルプス山行

蔵屋 とよ

憧れの北アルプス行き計画を聞いた時、3年越しの夢が叶うと胸が騒ぎ落ち着かなかった。新型コロナ感染症との闘いが始まって3年が経ち県外への旅行も控えていたためなおさら浮かれた。参加者10名は、横尾までのA班4名、北穂岳を目指すB班6名に分かれての行動となった。私は経験が浅いがB班を選んだ。穂高岳登頂ができる嬉しさと不安が半々の中の参加であった。

9月25日4泊5日分の荷物を背負い空路大阪へ。10時40分伊丹空港着。ここからマイクロバスで遠路上高地まで進む。乗り換えなしの貸し切りバスで車内でゆっくり過ごせた。予定の時刻を少し過ぎ、釜トンネルを抜けていよいよ上高地、大正池が見えて間もなく17時20分頃上高地バスターミナルに到着。バスを降りた瞬間はもとより河童橋まで歩きながら、梓川の美しく滑らかな流れに見とれた。河童橋から見る下流に焼岳、上流に前穂高岳、吊り尾根、奥穂高岳、西穂高岳、明神岳などの穂高連峰が広がっている。少し雲がかかっていたが夢に見たその風景に心が躍った。この日は2カ所に分かれて宿泊。

2日目、6時30分に河童橋から上高地山岳研究所(以下:山研)宿泊組と合流。先にB班6名は涸沢を目指し、A班4名は少し遅れて徳沢を目指してそれぞれ出発する。梓川沿いを歩きながら何度も周りの景色に目を止め、そのたびに憧れの地に來たことを実感する。きれいに整備された木道は歩きやすくその後もほぼ平坦な遊歩道を進む。7時50分、明神池に到着。橋の先にそびえる明神岳のパワーを感じながら次のポイント徳沢キャンプ場に向かう。9時35分徳沢キャンプ場着。おしゃれなロッジなどがあり賑わっている。ここは、井上靖氏の小説「氷壁」に徳沢小屋と書かれた徳沢園とのこと。数分休憩し横尾を目指す。比較的平坦な歩道が続き、途中歩道を横切る沢の流れの先にサワガニでも探しているのかサルが夢中に砂利を掘っていた。また、何ヶ所かクマよけの鐘が設置されており、各々カンカンと鳴らして通る。

10時40分横尾到着。ここで昼休憩、おにぎりを食べながら横尾大橋の向こうに見える山々を見あげこの先の風景を想像して落ち着かない。30分ほど休みいよいよ本日の目的地、涸沢を目指す。横尾を過ぎると今までのハイキングコースとは状況が変わり、徐々に登りが始まり陰しくゴロゴロした岩道になる。約1時間半で本谷橋到着。ここから涸沢カールまでは2時間30分かかったが、途中ゴゼンタチバナやナナカマドの鮮やかな赤い色に癒されながら岩を踏みつつ涸沢ヒュッテの標識が見えたとき一度に疲れが飛んだ。

15時30分、涸沢ヒュッテ到着。休憩を挟みながらも約9時間歩いた安堵感と目の前に広がる憧れの光景に

溜息がでた。月曜日ということもありテント場のカラフルな色は想像より少ないがそれでも50張りほどあった。ヒュッテは人数制限しながらも賑わっている。マスク着用、体温測定後に男女分かれて部屋で荷物から開放された。夕食までの短い時間もテラスからしみじみとパノラマを眺める。夕食後、再びテラスに出るとさすがに気温が下がっておりダウンジャケットを取りに戻った。前穂高岳、吊り尾根、奥穂高岳、ザイテングラート、涸沢岳、涸沢槍、北穂高岳など、山々の名前は帰宅後に復習した。

3日目の朝、5時に朝食。気になっていた天候も好転の予報。朝のモルゲンロートはタイミング悪く皆で見ることではできなかったがきれいに映った写真を見せてもらった。6時05分、6名の体調は問題なくいよいよ北穂高岳を目指して出発。ごろ石のテント場の中央を抜け涸沢小屋を横目に、初めから急登が続く。振り返るたびに涸沢ヒュッテ、テント場、涸沢小屋を見下ろせ、見上げれば穂高の山々が広がる。中腹からは、南側に遠く八ヶ岳連峰、富士山の黒い影も見えた。急斜面の岩場の恐怖あり半面ワクワクしながら鎖場、梯子を味わう。上空には標高3000メートル級の山小屋へ物資を運ぶヘリコプターが何往復もしている。4時間かけて奥穂高と北穂高の分岐、続いてスリリングな場所に北穂高のテント場(南陵テラス)、その後10分ほど登り10時50分、ついに北穂高岳に登頂。

憧れが現実となった瞬間だ。目の前の槍ヶ岳から広がる眺望、南岳から手前に続く大キレット、南側にはここまで登りながら見上げていた奥穂高、前穂高岳、東に常念岳、西に笠ヶ岳の姿を目に焼き付ける。北穂高小屋のテラスから槍ヶ岳をみながら弁当を食べおいしいコーヒーをいただいていると徐々にガスがかかり始め間もなく見えなくなった。ところが下山を始めると幸運にも徐々に晴れ始めた。岩場の危険な下りも注意を払いお互いの足場を確認しあってゆつくりと下山。ほんの一時小雨がパラついたが、16時誰一人怪我することなく涸沢ヒュッテに無事帰還。登頂までの足跡を確かめるように何度も振り返り改めて感動する。

翌日6時20分、涸沢カールに別れを告げて上高地へ戻る。霧雨の中、よくぞこんなに歩いたものだ感慨深く下ること8時間、14時20分に上高地到着、河童橋の上でA班の4名と合流しお互いを称えあう。

その夜は、山研にて北アルプスの思い出やこれからの山岳会について熱のこもった歓談や歌。憧れの地にて最後の夜は感動と疲れとあいまって興奮しながらもいつの間にか熟睡する。5日目の朝、山研の管理人さんへ感謝を伝え、上高地バスターミナルよりバスに乗り込み北アルプスに「また来る日まで」と別れを告げた。

[グループ山行] 南東北の山旅 10月15日～20日

橋口三枝子

東北の紅葉が見たいと3年前に計画をした。しかしコロナで延び延びになりようやく実現した。初日(16日)は浄土平登山口～東吾妻岳～一切経山～兵子～姥湯温泉。浄土平の湿原の中、見頃を迎えた紅葉と鎌沼に移りこむ景色を楽しみながら山頂手前の急坂を登ると広い東吾妻岳山頂に出る。展望も素晴らしく磐梯山もくっきり望むことができた。一切経山の山頂からは眼下に広がる五色沼に思わず驚きの声が出る。コバルトブルーのその美しさは魔女の瞳とも呼ばれる。その沼を見ながらガレ場の急斜面を下って家形山を越え兵子(ひよっこ)へと行くといきなり岩山が現れ、ここ行くの?という感じでよじ登って行く。そんな中、メンバーの一人の膝が痛くなり歩くのが大変そうで遅れがちになる。しかも危険箇所も多い上に陽も落ちてくる。焦る気持ちはあるが安全第一、ライトで足元を照らしながら慎重に歩く。やがて危険箇所もなくなりホットする。最後の長い梯子を下り姥湯温泉に18時到着。この日は朝5時半には出発、15時には到着の予定だったが何があるか解らない。やはり早立が大事と肝に銘じた。秘湯の温泉と言われる贅沢な宿で疲れをとる。

17日は西吾妻岳の予定だったが雨の予報もあり米沢観光を楽しむ。翌18日は八方台登山口～磐梯山～翁島登山口。しばらくはブナ林の紅葉を気持ちよく歩く。しかし、楽に登れる山ではなく急登を喘ぎながら登って行く。弘法清水の展望のいい所に着く。飲み物など出してくれる売店小屋もあり一息して磐梯山山頂。岩の上に小さな祠があり小沼もあちこち見られる。宝の山にバンザイして翁島登山口を目指す。大きな石がゴロゴロとした急な斜面を慎重に下る。この下りは大変だが見晴らしは最高。紅葉した山々・猪苗代湖、そしてスキー場が見えているがなかなか着かない。途中からはスキー場横の森林の歩きとなる。タクシーを予約していたので急いだ。少し遅れての到着となったが無事の下山を暖かく待ってくれていた。

最後の登山は安達太良山。ロープウェイで登山口へ。紅葉の見頃とあって平日にもかかわらず多くのハイカーで賑わっていた。智恵子抄の「安達太良の山に出ている空がほんとの空」という詩を感じながら溶岩の突起となっている山頂へ。北側斜面には初冬の気配が漂い樹氷も見られた。突起の山頂を下り稜線を歩くと火口跡の沼の平である。白褐色に覆われた風景はさながら月世界を思わせる。なかなか行くことができない東北の山、素晴らしい思い出となった。

帰る日には猪苗代湖、その湖越し見える磐梯山に飛び交う白鳥が見送ってくれた。



安達太良山・沼の平



磐梯山 山頂



五色沼

俳句

田村充子

河童橋雪の穂高嶺寄り来たる

立山のおこじょ隠るるお花畑

裸木に山繭一つ駒ヶ岳

室堂の窓をあくれば星月夜

頂上に仲間五人のサングラス

〔宮崎の自然〕 キレンゲショウマ

石井 久夫

キレンゲショウマは一属一種の珍しい貴重な植物である。発見されたのは1888年8月、高知県の植物研究者・吉永虎馬は、愛媛県石鎚山北面の谷すじで黄色の見事な花をつけた見知らぬ大きな草を見つけた。何日後、折から四国を採集旅行をしていた東京大学教授・矢田部良吉(1851～1899)に面会してこの植物をみせたところ「全く見当がつかない、一見したところキンポウゲ科のレンゲショウマ(蓮華升麻)に似ているのでキレンゲショウマと名づけよう」ということになった。

矢田部は翌々年(1890)の12月、この名をそのままに属名に採用し植物雑誌に新属種属キレンゲショウマ属 *kirengeshoma yatabe*、新種キレンゲショウマ *K. palmata yatabe*として発表した。日本人によって日本の雑誌に発表された「属」であった。これはリンネ以来150年近く欧米人の手にあった日本植物研究の主導権が名実ともに日本人の手に渡った記念すべき出来事であった。

キレンゲショウマは、高さ1m、葉身は広卵形長さ10～20cm、葉のふちは掌状に浅く切れこみ、花序は集散状で中性花がなく8月頃に大きな黄色の花をつけ、花冠はラッパ状で花弁は5個、長さ3cm、雄しべは15本、子房は中位で3室、花柱は細かく3本2～3cm塑果の時期まで残る。近くにはサワグルミ林があり山地林内の湿った岩上または岩礫地に生える。

キレンゲショウマの分布は奈良県の大峰山、四国の石鎚山・剣山、九州宮崎県の洞岳・祖母山・白岩山・国見岳等であり、国見岳が生育の南限である。ブナ帯の草地に生育する一属一種の珍しい植物で、和名がそのまま学名になった日本の準特産種の植物で襲速紀(そはやき)要素(九州から東海道西部までの表日本のこと)で九州における最大の夏緑広葉樹域となる湿地性立地指標植物となった。

〈メモ〉
キレンゲショウマ
黄蓮華升麻
Kirengeshoma palmata yatabe
稀に産する貴重な植物で黄色の透き通るようなきれいな花が開く。花弁は長楕円形で先がとがり長さが2～3cm、雄しべ15本、花柱は3～4本塑果は広卵形で熟すると3裂し多くの種子を出す。



〈襲速紀要素〉
南九州の古い呼び名「襲の国」と九州と四国の間の豊予海峡の「速吸瀬戸」、紀伊半島の「紀伊の国」のそれぞれの頭文字を取って「襲速紀」と表現される。何を意味しているかという、九州と四国、紀伊半島のそれぞれの南側に共通の生き物がいるという。この地域は、中央構造線以南にあたり日本列島の長い歴史



の中で、生物の分布に変化が現れたものと推測されている。(近畿地方環境事務所、アクティブ・レンジャー日記より抜粋)。

〔自然保護委員会〕 小谷登山口清掃作業・双石山登山 12月10日(土)

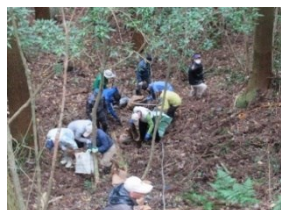
前原満之

今年も、宮崎市山岳協会の協力を受けて実施。場所は小谷登山口の先、「鏡洲地区の皆様へ」の看板のある所(赤木分11)とその先2ヶ所(赤木分15～17と赤木分19)である。赤木分11は昨年滑車等使い、大量のゴミを回収した所であるが、まだゴミが残っており、再び実施することとした。傾斜のきついところであるが、今年は滑車を使わず、ロープで引き揚げた。大型ゴミは昨年引き上げており今年はほとんどない。赤木分15～17は最初気付かなかったが、ここに大型ゴミが沢山あった。結局回収したゴミは、72袋(燃えるゴミ48、

燃えないゴミ24)とボランティア袋に入らない冷蔵庫、洗濯機、タイヤ、農業用ビニール等である。作業は8時から約2時間半。現場に置いたゴミ袋は後日市環境業務課にて回収し大型ゴミは県土木(クリーンロードみやざき推進事業)に回収してもらった。作業後の登山には5名が参加した。

参加者28名(当支部14名)

清家順子・谷口敏子・服部澄子・橋口三枝子・前原満之・荒武八起・日高研二・谷口菊美・武田芳雄・服部岩男・弓削達雄・橋口光博・四宮林三・川越政則 ※アンダーラインが登山参加者



林内のゴミを回収



回収したゴミを分別



回収したゴミの処理は行政に依頼



参加者

[事務局報告]

Ⅰ. 全国支部連絡会議

2022年12月3日 10時～12時 京王プラザホテルにおいて全国支部連絡会議が開催された。支部長・荒武、副支部長兼事務局長・日高の2名が参加した。会議の内容は以下のとおりである。

- (1) 開会のあいさつ 古野会長
- (2) ユース交流会について 松原理事
- (3) 広島支部ユースの活動について 広島支部吉村会員
- (4) 山岳祭紹介と宮崎ウェストン祭について 坂井副会長、宮崎支部荒武支部長
- (5) 支部における交流の実態 北海道支部 藤木支部長
- (6) 支部の保有する宿泊施設の紹介 松田理事
- (7) 古道調査の進捗について 古道プロジェクト 近藤委員、永田委員
- (8) 来年度の事業計画の記載方法について 南久松常務理事、長島理事、
- (9) その他

Ⅱ. 年次晩餐会・記念講演会

2022年12月3日 13時より京王プラザホテルにおいて記念講演が開催され、宮崎支部からは、多田・日高・荒武の3名が聴講した。記念講演の内容は以下のとおりである。引き続き催された年次晩餐会にも出席した。

- (1) 6000m級未踏ラインとファスト・マウンテニアリング
第1部 海外登山助成登山隊報告 山田利行(東海支部)
第2部 アマ・ダブラム南西稜 海外登山助成登山隊報告 JAC広島登山隊 吉村千春、大田由孝、大野雅樹、原駿介
第3部 未踏峰ブンギ遠征 120周年記念事業 ヒマラヤキャンプ2022年登山隊 後藤希介、加々見太地、安達正貴
- (2) 第24回秩父宮記念山岳賞受賞記念講演
千日刈峰行とその展開 新宮山彦グループ(代表: 沖崎吉信)

Ⅲ. 日本山岳会創立120周年記念事業

日本山岳会は2025年(令和7年)に創立120周年を迎えることから、それに向けて下記の各種事業が進行している。その中の全国古道調査には宮崎支部から薩摩街道、飫肥街道、霧立越えを取り上げ、鋭意調査中である。

日高 研二

1. 全国山岳古道調査 2. エベレスト登頂50周年記念フォーラム 3. 植村直己冒険館などで写真展示会・講演会開催 4. 所蔵図書・資料デジタル化事業 5. グレートヒマラヤトラバース 6. ヒマラヤキャンプ 7. 山の天気ライブ 8. 日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好合同登山

Ⅳ. 支部年次晩餐会

2022年12月10日(土)18時より「レストランブラウンダー」を全館貸しきり、毎年恒例の晩さん会を開催した。新型コロナウイルス感染の収束の見えない中での開催であったが、19名の会員の出席があり、コロナ感染防止対策を講じながら、今年一年間の定例山行活動の振り返り報告、スピーチ、ビンゴゲームなど粛々と行い、最後に全員で「日向山旅讃歌」を静かに合唱し、楽しい宴を閉じた。



支部行事予定(1月～3月)

[事務局だより]

月 日	行 事 名	備 考
1月5日(木)	第278回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
1月8日(日)	1月 定例山行-1	可愛岳 ヤマダ電器駐車場7時30分集合
1月22日(日)	1月 定例山行-2	日南津の峯、他 清武ナフコ駐車場8時集合
2月2日(木)	第279回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
2月11日(土)	2月 定例山行-1	比叡山 ヤマダ電器駐車場7時集合
2月25日(土)	2月 定例山行-2	高千穂秋元(福寿草) ヤマダ電器駐車場7時集合
3月2日(木)	第280回定例登山研究会	宮崎市中央公民館
3月(未定)	諸塚山山開き	諸塚村
3月(未定)	双石山山開き	宮崎市

支部会務報告(9月～12月)

月 日	事業・行事	開催場所	人員	備 考
9月1日(木)	第274回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
9月11日(日)	9月 定例山行1	阿蘇一の峰・二の峰	19	
9月24日(土)	9月 定例山行2	えびの高原池めぐり	5	
10月6日(木)	第275回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
10月9日(日)	10月 定例山行-1	猪八重溪谷		荒天のため中止
10月22日(土)	10月 定例山行-2	開聞岳	9	
11月3日(木)	宮崎ウェストン祭	高千穂町	21	参加者総数38
11月10日(木)	第276回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	16	
11月23日(水)	11月 定例山行	霧島烏帽子岳		荒天のため中止
12月1日(木)	第277回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	15	
12月3日(土)	全国支部連絡会議	東京	2	
12月3日(土)	年次晩餐会	東京	3	
12月10日(土)	清掃登山	小谷登山口周辺	14	参加者総数28
12月10日(土)	支部晩餐会	レストラン フラウンダー	19	
12月18(日)	12月 定例山行	山陰逃散一揆の道	7	

投稿のお願い 山行に関するものはもとより、随筆・詩・短歌・俳句など何でも結構ですので皆様の積極的な投稿を何卒よろしく願います。また支部報に関するご意見などありましたら編集委員会へ忌憚なくお寄せください。

カラーページのご案内 配布します本支部報は、経費節減のため白黒印刷ですが、日本山岳会ホームページの宮崎支部を開きますと全ページがカラーで閲覧できますので是非ご覧下さい。

編集後記

78号から編集委員として、先輩方の支部報への熱い思いと継続して発行して行く事の大切さを感じつつお手伝いさせて頂いています。

猛威を振ったオミクロン株による新型コロナ第7波も秋には減少傾向となり規制緩和もあって、県外への支部や個人での山行、9月には念願の上高地、北穂高岳へのグループ山行が実現されました。また、11月に3年ぶりに新しい形でウォルター・ウェストン氏を顕彰するウェストン祭を行い、それらのご報告もできました。

今また、第8波が押し寄せていますが、今年が少しでも平和で穏やかな年となりますように！（栗林）

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 第80号

発行責任者：荒武 八起

編集委員：谷口 敏子(編集委員長)、多田 登美子
栗林 淳子

事務局：日高研二

〒880-0933 宮崎市花山手東2丁目17-11

Tel, Fax 0985-52-6685, 080-1766-1207

E-mail: k-hidaka@har.bbq.jp

口座：ゆうちょ銀行 記号17310 番号16269811

名義人：(社)日本山岳会宮崎支部